

コミュニケーション

No. 104

2022.10月号

ちょうどいいから
住みやすい! 秋田中
LIFE
秋田県立大森山動物園
市民と広げるまちへの誇りと愛着

秋田市大森山動物園



あきぎん オモリンの森

Contents

- P2~3 園長あいさつ／こんにちは! あかちゃん／移動動物
計報／飼育動物数
- P4~5 【特集】ホッキョクオオカミ～飼育員との絆～
- P6 動物病院から(天寿を全うしたシンリンオオカミのシン)
- P7~9 飼育レポート
- P10~11 イベントレポート／今後のイベント
- P12 飼育日誌／お客さまの声／かたばた通信

フタコブラクダの幸(左)と福

動物園と展示の維持

園長 小松 守

夏休みの動物園はいつも以上に親子連れでにぎわう。動物との出会いや家族との思い出づくりを楽しみ、多様な姿形や生き方を学んだり、さらには生命や自然の不思議さを感じたりと、動物園の教育的な役割を改めて意識する。

生きた動物に対し「展示」という言葉を使うことに違和感を抱かなくもないが、自然史博物館と同じように動物園は展示機能を持つ施設でもある。動物園の営業を続けるため、展示動物の維持は動物園にとって不可欠な根幹の仕事といえる。適切な動物飼育と計画的な繁殖と継代が求められるが、そこに難しさがある。命ある動物は、病や死を伴うから動物園は常にそれらと向き合わねばならない。

現場の飼育員、獣医師は目に見えない苦勞が絶えない。最近も長く介護した老オオカミを見送ってくれたが、一方で海外から新たなオオカミを迎え、展示のためその馴致にも気を配る。ユキヒョウに新たな命の誕生といううれしいニュースがあったが、その子育てサポートにも気を遣う。また、国内の動物園ではめっきり少なくなったラクダは、大森山動物園でも1頭きりになり、海外から新たな個体を迎え入れ、ラクダの血を絶やさない努力も始まっている。動物園の展示を維持するには飼育員と動物との調和の取れた二人三脚が絶対要件である。



新たに導入したオオカミの姉妹

こんにちは!

あかちゃん

2022年1月以降に大森山動物園で生まれた赤ちゃんをご紹介します。



ユキヒョウ

2022年4月30日に「アサヒ」と「リヒト」の間に1頭の赤ちゃんが生まれました。当園では22年ぶりの繁殖です。詳しくは9ページの飼育レポートをご覧ください。



マーコール

2022年6月11日に3年ぶりに生まれました。3年前に生まれた「ゆべし」がお母さんです。初めてのお産で心配でしたが、子どももしっかりおっぱいを飲み、元気に育っています。「みたらし」という名前になりました。



アビシニアコロブス

2022年7月12日にアビシニアコロブスの「トリトン」と「レイア」の間に3頭目の赤ちゃんが生まれ、「チヨロギ」と名付けられました。アビシニアコロブス一家がとてにぎやかになりました。詳しくは8ページの飼育レポートをご覧ください。

この他、ワオキツネザル、ファンボルトペンギン、モルモット、ニホンザルにも赤ちゃんが生まれています。

よろしくね!

仲間入りした動物たち



しなの／メス

トナカイ

2022年3月29日に長野県にある須坂市動物園からトナカイの「しなの」がやってきました。しなののお父さんは、繁殖を目的に当園から須坂に貸し出した「元気」です。元気がお父さんになり、娘のしなのが里帰りを果たしました。

フタコブラクダ

2022年8月17日に8カ月齢のオスと5カ月齢のメスがアメリカから来園しました。2頭はまだ幼くてかわいいラクダです。メスには粉ミルクを1日2回、朝と夕方に飲ませています。早く大きくなってね。



幸／メス 福／オス

ホッキョクオオカミ

2022年4月16日にドイツの動物園から3頭が来園しました。オスの「ムーン」、姉妹の「ルーシー」と「ニッキー」です。ホッキョクオオカミは当園では初めての展示です。詳しくは4ページの特集をご覧ください。



ムーン／オス



ルーシーとニッキー／メス

シマフクロウ



愛花／メス

2022年5月27日にシマフクロウの「愛花」が長野市茶臼山動物園へ旅立ちました。シマフクロウの管理計画に基づく移動です。当園では、今後、シマフクロウのペアを導入して繁殖に取り組んで行く予定です。

大森山を後にした動物たち

元気でね!



令／オス

アムールトラ

2022年5月31日にアムールトラの「令」が那須どうぶつ王国(栃木県)へ移動しました。2019年に生まれた4つ子の中の最後の1頭で、人懐こい性格の人気者でした。

この他、アメリカビーバーの「チャル」(メス)が羽村市動物公園(東京都)へ移動しました。みんな、新しいところでも、頑張っってね。

忘れないよ...

シンリンオオカミ

訃報

オスの「シン」が2022年8月7日に亡くなりました。2005年に富山市ファミリーパークから同腹の「キララ」(メス)と来園後、2010年からは「ジュディー」(メス)と仲良く暮らしました。6月上旬に高齢のため展示を終了し、健康管理ができる動物病院で余生を過ごしていました。(詳しくは6ページの「動物病院から」をご覧ください。)当園のオオカミでは最も長生きで17歳の大往生でした。



シン／オス

レッサーパンダ

2022年5月23日に「ユウタ」が15歳で亡くなりました。2008年10月18日に千葉市動物公園から来園しました。お父さんは、後ろ足で立つ姿がかわいいことで人気を博した風太です。当園ではユウタと「陸」との間に「ゆり」が生まれ、ゆりがこれまで4頭の子どもを産んだので、ユウタは4頭のおじいちゃんでした。



ユウタ／オス

この他、ケヅメリクガメ、フンボルトペンギン、コモンマーモセット、アフリカタテガミヤマアラシ、ワオキツネザル、プレーリードッグ、ニホンザル、ホンDIGツネ、トナカイ、ニホンリス等が亡くなりました。

飼育動物数 (2022年6月末現在)

哺乳類	49種	339点
鳥類	24種	127点
爬虫類	12種	26点

両生類	3種	6点
魚類	3種	15点
無脊椎	1種	23点

合計
92種 536点



ルーシーとニッキー

1. はじめに

令和元年に、秋田市にお住まいの篤志家の方から、「動物園のために使ってほしい」といただいたご寄付を活用して、今後国内では入手が難しくなると思われるフタコブラクダとホッキョクオオカミ(当初の予定はシンリンオオカミ)を海外から導入することになりました。

当初、令和3年度中に動物を導入する予定でしたが、新型コロナウイルスなどの影響により搬入の見通しが立たなくなり、延期となりました。時間はかかりましたが、令和4年4月にオオカミが、8月にはラクダが無事に搬入されました。

この特集では、大森山動物園で初めて飼育するホッキョクオオカミにスポットを当てて、みなさんに紹介したいと思います。

2. ホッキョクオオカミとは

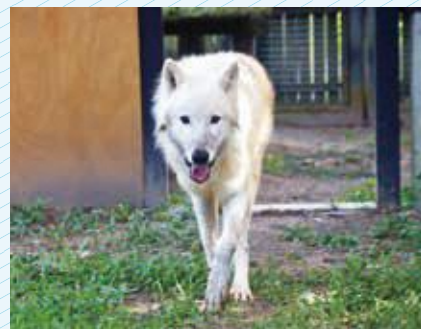
ホッキョクオオカミは「幻の白いオオカミ」と呼ばれており、身体が真っ白な長い毛に覆われています。人を寄せ付けない極寒の地に住むオオカミで、その生態はわかってい

ないことも多くあります。

ホッキョクオオカミの生息地は、北米大陸の北端から北極にかけての地域やグリーンランド北部で、最低気温はマイナス50度にまでなります。ここで暮らせるのは、この寒さに適応した数種類の生き物だけです。アラスカなど一部地域ではまだ個体数が比較的多いものの、他の地域では、彼らが生きていくのに十分な食料や生息地が不足しているため、個体数が非常に少なくなっています。

3. 導入した3頭について

2022年4月16日に、3頭の若いホッキョクオオカミが2つのドイツの動物園から来園しました。オスのムーン(2歳)と、姉妹のルーシー(姉、2歳)とニッキー(妹、1歳)です。



ムーン

ムーンは身体が大きく、オスらしいカッコイイ風貌をしています。表情はとても優しく、人懐こい性格です。好奇心も旺盛で活発です。ルーシーは、落ち



ニッキー(左)とルーシー

着いた慎重な性格で、上品さの漂う知的美人です。ニッキーは妹らしい、快活さと人懐こさに好奇心も兼ね備えたアクティブな女の子です。姉妹はとても仲が良く、一緒に展示場に出ると大好きな水場でじゃれあったり、展示場を走り回ったり、とても楽しそうです。

清掃時、網越しに顔を合わせるムーンとも今のところ相性は悪くはなさそうで、ヒンヒンと鼻を鳴らしてコミュニケーションをとっています。

4. 展示までの道のり

4月に大森山に到着してから、外展示場に出るまでの約2か月。猛獣舎の中では、担当者とオオカミたちの間でしっかりと絆づくりをしていました。オオカミはとても警戒心が強く、神経質で賢いため、人間に対して不信感を抱くと距離を取るようになります。動物園の動物たちは、どの種もそのような特性は持っていますが、オオカミは特にそれが顕著に表れるということを初めて実感しました。動物が人間に対して不信感を抱くと、飼育する上でとても不便なので、まずは距離の近い室内で、担当者に慣れてもらうことから始めました。



飼育員からエサをもらうムーン

最初のステップは担当者から餌をもらうことです。以前展示していたシンリンオオカミのジュディーは、担当が代わったばかりの頃、付き合いの長い飼育員からしかエサを受け取ってくれませんでした。ホッキョクオオカミたちはどうかとドキドキしましたが、ここは3頭とも問題なくエサを受け取ってくれました。

次のステップは部屋の移動です。飼育員がオオカミと一緒に空間に入るわけにはいきませんので、部屋を掃除する際は、オオカミに自ら部屋を移動してもらわなければなりません。ここで最初のステップで行った「飼育員から直接エサをもらうこと」が生きてきます。オオカミが部屋から通路に出るように飼育員がエサで誘導し、部屋の扉を閉めて掃除をします。好奇心旺盛なムーンとニッキーは難な

くクリアしましたが、警戒心が強く慎重なルーシーは、部屋から移動することに抵抗を感じていました。そして移動した後に自分たちの部屋の扉が閉められる



室内から展示場への移動

ことにも嫌悪感と警戒心を強めていきました。それでも、最初に訓練した「飼育員から直接エサをもらうこと」はしっかりと染みついていたようで、警戒しながらも移動してくれました。

最後のステップは展示場との行き来です。警戒心が強く神経質なオオカミは、開放的な展示場に出ると寝室には帰って来なくなる可能性があるかと聞いていました。室内の移動がスムーズに出来ていたムーンとニッキーは心配していませんでしたが、心配の種はルーシーでした。二度と室内に戻って来なかったらどうしよう、とハラハラしていましたが、初めての展示場デビューのあと、きちんとニッキーと一緒に戻って来てくれました。「エサは室内で食べるもの」「飼育員が室内でくれるもの」ということをきちんと学習できていたようで、警戒しつつも展示場の行き来が可能になりました。

5. 動物との距離が近いガラス展示

2021年秋、オオカミ展示場に新たにガラス面が設置され、今までは網越しでしか見られなかったオオカミを、より間近に感じられるようになりました。



ガラスに鼻をこすりつけるムーン

活発なホッキョクオオカミがガラス越しにさまざまなアクションをしてくれるので、3頭が泥だらけの前脚でガラス



来園者に興味津々

面にお絵かきする様子や、興味津々で近寄ってくる表情をじっくり観察してもらうなど、いろいろな楽しみ方を見つけてほしいと思います。

動物病院から



天寿を全うしたシンリンオオカミのシン

獣医師 高橋 拓

2022年6月、シンリンオオカミのシン(オス、17歳)とジュディー(メス、16歳)は、10年間一緒に生活してきた展示場を離れ、2頭で穏やかに過ごすため動物病院へ移動しました。6月4日には2頭の引退イベントを行い、県内外からたくさんの方々に見守られながら、2頭の展示生活は幕を下ろしました。

飼育下でのオオカミの寿命は15年程度と言われており、シンもジュディーも高齢のために足腰が弱くなり、展示場の段差をまたぐことや、階段の登り降りが大変になってきていたところでした。動物病院内には段差も階段も無いため、比較的足腰には負担のない生活が送れます。シン達が快適に過ごせるように、床にゴムマットを敷いて滑って転ばないように対策をし、寝室の外は歩きやすいようにふかふかの砂を敷きました。寝室は冷暖房完備で高齢の2頭には環境が整った場所といえます。

病院に移動してからのシンとジュディーの生活を紹介します。朝は、ジュディーは起きて歩き回っていますが、シンは大抵寝ています。「おはよう」とあいさつをし、



シン(下)とジュディー(2012年11月)



シン(右)とジュディー(2022年1月)



引退イベントの様子



シンの治療の様子

シンを起こします。シンは顔だけこっちに向け、眠そうに起きてきます。その後、隣同士の寝室にいる2頭と一緒にします。展示場でも行っていましたが、ジュディーが「クンクン」と鼻を鳴らしてシンを呼びに行きます。いつもの日課です。シンもうれしそうに寝室を回りながら隣の寝室に移動します。日中は2頭一緒ですが、以前より休んでいる時間が長くなりました。夕方になるとエサの時間です。給餌するとき、シンは一目散にエサに向かって来るので、ジュディーはおいていかれます。そうして夜間は別々に寝ることになります。まるでテレビドラマに登場する長年連れ添った老夫婦のような1日でした。

穏やかに暮らしていた2頭ですが、7月26日からシンは後ろ足に力が入らなくなり、立つことができなくなりました。前足は動くため、体を引きずったところに床ずれができてしまい、獣医師や担当者が毎日患部の洗浄と消毒をして懸命に治療を行いましたが、残念ながら8月7日に死亡しました。

シンは寝ているときと同じ顔で亡くなっていて、安らかに天寿を全うしたと思います。

飼育レポート

report
01

キリン「カンタ」の思い出

飼育展示担当 柴田 典弘

2022年1月2日早朝、キリンのカンタが死亡しました。カンタは2012年6月14日に長野市茶臼山動物園から繁殖を目的としてやって来ました。

通常、来園後3日間から1週間程度は、長い時間を過ごす室内の環境に慣らすため、すぐには外に出さず収容した状態で観察するのが一般的ですが、カンタが来るまでの約1年間を一頭で飼育していたリンリン(メス、当時8歳)が室内にいるカンタを全く警戒していなかったことや、収容した状態のカンタが落ち着かず、与えた飼料を採食しなかったほか、室内での周回や往復などのストレス行動も確認されたことから、急きよ翌日から柵越しの見合



カンタ(2019年3月)

いを実施することになりました。外に出た2頭は柵越しに向き合い同じ枝の葉を食べ、互いに顔を寄せ合うなどの理想的な行動が見られたため、来園3日目の6月16

日から同居を開始しました。それ以降、2頭はずっと一緒に飼育してきたキリンのように良好な関係が続きました。ハズバンダリートレーニングも順調に習得し、このまま健康で長く愛されてほしいと願っていました。

2019年には初の交尾を確認。この1度の交尾で妊娠し、2020年7月14日にリンリンはケイタ(オス、現在2歳)を出産し、カンタは自分の子孫を残してくれました。

2021年12月30日、急激な食欲低下や下痢などの症状が出たため、注射や内服の治療を行いました。2022年1月1日には、食欲が戻るなど若干の回復が見られましたが、翌2日早朝に寝室内で倒れ込み、午前7時頃に死亡を確認しました。

通常、オスのキリンは成長と共にゴツゴツした特有の顔つきに変化することが多い中、カンタは最後まで幼さが残っていました。11歳という早過ぎる生涯でしたが、カンタからはキリンの飼育についてたくさんのことを学び、たくさんの思い出をもらいました。

ありがとう、カンタ。



まんまタイム(2017年4月)

report
02

リリーの体調不良とその対応について

獣医師 小川 裕子 飼育展示担当 西方 理

アフリカゾウのリリー(メス、推定33歳)は、2018年10月に仙台市八木山動物公園から、当園のだいすけ(オス、死亡時推定31歳)との繁殖のために来園



飼育員15人がかりの吊り上げ作業

しましたが、2021年3月にだいすけが死亡したため繁殖相手がいなくなり、2022年7月に八木山動物公園へ帰る予定となっていました。

しかし、2022年4月23日、リリーは体調不良で突然倒れてしまい自力で起き上がれなくなりました。ゾウが倒れて起き上がれなくなると、3トン近くある自らの体重で内臓が圧迫されて血流が悪くなり、循環不全や呼吸不全に陥り死亡する事があります。このような場合、チェーンブロックで吊り上げると、再び自力で立てることもあるため、すぐに吊り上げ準備に取りかかりました。吊り上げ作業は初めての経験でしたが、以前に八木山動物公園のチェーンブロック講習会に参加させてもらった経験が活かされ

ました。作業開始から約2時間でリリーの体を起こし、最後はリリーが後肢をふんばり自力で立ち上がることができました。

その後のリリーの体調管理や治療については、八木山動物公園をはじめ、多くの動物園と連携を取りながら継続して行っています。食事や運動についても、普段より多くの樹木を与えたり、エサで誘導してコミュニケーションをとりながら歩かせるなど、体調の維持に努めています。

こうした取り組みもあり、リリーの体調は落ち着いているように見えます。体調不良の原因については、はっきりとは分かりませんが、定期的な血液検査等を行い、継続的に経過を観察しています。

今後も冬に向けて寒さ対策を万全にするなど、リリーが無事に冬を乗り越えられるように、ゾウ担当一丸となって取り組んでいきます。



自力で立つリリー

report
03

チンパンジーの豊かな暮らしのために

飼育展示担当 舘岡 幸枝

皆さんは「環境エンリッチメント」という言葉をご存知でしょうか。これは、限られた空間の中でも動物たちの野生本来の行動を引き出し、健康に暮らすことができるような取り組みのことをいいます。今回はチンパンジーの食に関する環境エンリッチメントについてご紹介します。

チンパンジーは、野生下では一日の大半を食物の獲得に費やします。木の実や木の葉、樹皮や樹液に留まらず、シロアリなどの昆虫や卵など多種多様なものを食べ、道具を使用してエサを取ることで有名です。しかし、動物園では飼育員がエサを準備するため、探す必要がありません。これにより生まれてしまう「暇な時間」は、チンパンジーにとってストレスとなり、病気の原因となることもあります。

そこで、採食時間を延ばし暇な時間を減らすために、エサが取りづらくなるよう細工をした容器（フィーダー）の中にエサを入れて与えています。

例えば、消防ホースや空のペットボトルに、ペレットやヒマワリの



消防ホースとエサ

種・クルミなどを入れたものや、枝を使えばジュースが飲める仕掛けのものなど、なるべく多種多様な品目を用意しています。

当園では4頭のチンパンジーを飼育しており、それぞれの個性に合わせたフィーダーを用意しています。最年長のジェーン（メス、55歳）はとても器用で、枝を穴から差し込み、ジュースが入ったお皿につけて舐めるタイプのフィーダーが得意です。枝先をかみほぐして繊維を広げ、より多くのジュースを舐められるように工夫しています。一方、J太郎（オス、17歳）は消防ホースの中にナッツなどを入れたフィーダーを与えると、一生懸命取り出そうとしますが、うまくいかないと逆にストレスになるため、程よく中身が出せる長さのものを与えています。

チンパンジーの豊かな暮らしのために、今後もさまざまな取り組みに挑戦していきたいと思っています。

ジュースがついた枝を舐める
ジェーンreport
04

ベビーラッシュでにぎわうサル舎

飼育展示担当 鈴木 昌典

2020年10月に新しいサル舎が完成し、翌年3月のオープンから1年半が過ぎた最近のサル舎の近況を報告します。現在、サル舎はベビーラッシュです。

2021年11月にフクロテナガザルに初めて赤ちゃんが生まれ、2022年3月、5月にはワオキツネザルに2頭、7月にはアビシニアコロブスにも1頭赤ちゃんが生まれました。

フクロテナガザルは、サル舎完成に合わせて当園で初めて飼育し、繁殖も初めてでした。母親のワタルも初産だった事から心配でしたが、しっかり子育てをしています。赤ちゃんだった「天（テン）」も成長し、最近は一人で遊び活発に動き回っています。



フクロテナガザルの母子

ワオキツネザルには2つの大きな群れがあり、それぞれの群れから1頭ずつの繁殖です。こちらにも順調に成長していますの

で、群れの中から背中に抱かれていた子どもを探してみてください。

アビシニアコロブスのレイアは3回目の子育てです。1回目、2回目の出産時期は冬でしたが、今回は夏の出産になる事が心配でした。レイアは出産後の数日は、子育てに疲れた様子でしたが現在は落ち着いており、ベテランお母さんとして安心して任せています。アビシニアコロブスの赤ちゃんは、大人とは異なり全身真っ白で、この白い姿を見られるのは生後3か月ほどです。徐々に黒い毛が生え、秋には大人と同じ色の体毛に変化します。サル舎のかわいい子どもたちをぜひ見にきてください。



アビシニアコロブスの母子

report
05

ユキヒョウの赤ちゃん誕生

獣医師 湯澤 菜穂子

2022年4月30日、大森山動物園では22年ぶりとなるユキヒョウの赤ちゃんが誕生しました。母親のアサヒ、父親のリヒトにとって初めての子どもで、性別はメスです。アサヒは出産当時10歳で、ユキヒョウの初産としては国内最高齢となりました。

今回の繁殖シーズンがこの2頭の初めてのペアリングで、アサヒの年齢が繁殖にはやや高齢であったこともあり、残り少ない貴重なチャンスを逃すまいと観察を続けていましたが、アサヒの発情兆候がなかなかみられず、不安続きの日々でした。

1月中旬になり、やっとアサヒの発情兆候が確認され、その翌日からすぐに2頭の同居を行いました。繁殖には至



リヒト(左)とアサヒ

らなかったものの交尾経験のあるアサヒに対し、何もかもが初めてのリヒトは、同居初日は戸惑いから逃げ腰でしたが、目覚ましい成長を見せ、ごちないながらも数日間にわたり交尾体勢をとったことを確認しました。

同居から約3ヵ月後、産箱のカメラ越しにアサヒが1頭の赤ちゃんを出産するのを

目にする事ができました。初産であるにもかかわらず、アサヒはしっかりと子育てをしており、立派なお母さんです。

赤ちゃんはすくすくと成長しており、特に自分でお肉を食べるようになってからは日に日に大きくなっているように感じます。定期的に健康診断を行っており、以前は一部発達状況に留意すべき点もみられましたが、成長とともに改善し、今では展示場を元気に駆け回れるようになりました。引き続き、赤ちゃんが健康に成長していけるよう見守っていきます。



赤ちゃんとアサヒ

report
06

コウノトリの有精卵移動

飼育展示担当 齊藤 光貴

日本では、野生のニホンコウノトリは乱獲や環境悪化により、1971年に一度絶滅しました。2005年に兵庫県立コウノトリの郷公園で日本初放鳥が実施され、その後は野外でも放鳥個体が繁殖し順調に数が増えています。2022年8月には野生個体数が300羽を超えました。

大森山動物園では、野生のコウノトリの遺伝的多様性を図るため、当園で飼育しているコウノトリの有精卵を他施設に移送する取り組みを行っており、移送した卵はヒナになって成長すると野外に放鳥されます。

今年は5月10日に、千葉県野田市にあるコウノトリ飼育



コウノトリのつがい

施設「こうのとりの里」に当園の有精卵を移送し、5月12日に無事にヒナが1羽誕生しました。このヒナはオスで「はく」という愛称がつけられました。「はく」はすくすく育ち8月3日に施設の天井のケージを開け、5日に大空へと飛び立ちました。放鳥する時は、野外でもどの個体が識別できるように脚に色のついたリングを付けますが、「はく」は左脚に2つの青リング、右脚に青と緑2つのリングがつけられています。

放鳥されたコウノトリは全国で飛来が確認されています。

もし、秋田で見かけることがあれば、脚についているリングの色を見てみてください。「はく」が生まれ故郷の秋田に帰ってきているかもしれません。



水辺を歩く「はく」(野田市提供)

イベントレポート

通常開園スタート・フクロテナガザルの赤ちゃん命名式(3月19日)

開園セレモニーでは、穂積市長のほか、高木美保名誉園長やネーミングライツ・パートナーの秋田銀行・新谷頭取にもご出席いただき、秋田銀行のキャラクター「こみみちゃん」が加わった新しいデザインの看板の紹介も行いました。

また、サル舎～天空の楽猿～で、2021年11月24日に生まれたフクロテナガザルの赤ちゃん「天(テン)」の命名式を行いました。



新しくなったネーミングライツ看板の前で



フクロテナガザルの赤ちゃん命名式

飼育の日イベント(4月17日)

4月19日の飼育の日に合わせ、普段は実施していない「ミニチュアホースの飼育体験」や「飼育員なりきり体験」などを行いました。

また、「飼育員の1日パネル展」では、飼育員の1日の仕事や、作業で使う7つ道具を紹介しました。



ミニチュアホースの飼育体験

飼育員なりきり体験

ゴールデンウィークイベント(4月29日～5月8日)

園内に設置している情報板「どうぶつ学ぼうど」の中からNo.1の作品を決める「学-1グランプリ～どうぶつ学ぼうどNo.1決定戦～」を開催しました。来園者による投票で1位に選ばれたのは、アムールトラについて紹介した作品でした。

このほか、「チンパンジーの秋田名物を食べ尽くせ!」や「ヒツジの毛刈り実演」などのイベントを開催しました。



1位に選ばれたアムールトラの学ぼうど

ヒツジの毛刈り実演

春の動物ふれあいフェスティバル(6月5日)



ウオーククイズ



チンパンジーのお宅を訪問!

園内9か所に設置したクイズに挑戦する「ウオーククイズ」や、動物を普段展示している屋外展示場を見学する「動物のお宅訪問」、ポニーやトナカイと写真を撮ることができる「動物との記念撮影」などを開催しました。

飼料作物スダックスの共同栽培(5月10日～7月12日)

今年も浜田小学校と栗田支援学校の3年生20名が参加し、5月に堆肥の散布、6月に種まき、7月に収穫作業を行いました。

初めは慣れない作業で恐る恐る刈り取っていた児童たちでしたが、次第に上手になり、気付けば運搬用の一輪車はいっぱいになっていました。その後すぐにゾウ舎へ運び、アフリカゾウのリリーにプレゼント。無事に給餌体験を終えると、満面の笑みを浮かべていました。



収穫作業



スダックスをリリーにプレゼント

第45回 親と子のふれあい写生大会(7月16日～8月7日)

園内での密集を避けるため、参加希望者に画用紙を配布して、自宅で作品の制作を行いました。提出された375点から、秋田市造形教育研究会による審査で42点が入賞し、上位入賞者には9月4日の表彰式で賞状と副賞を贈呈しました。市長賞など上位3賞へ贈呈されたオモリントロフィーは、今年も新屋ガラス工房の協力で制作されたものです。



市長賞

秋田大学教育文化学部附属小学校5年
大橋 つくる「ダイナミックまんまタイム」



秋田市教育長賞

秋田市立外旭川小学校1年
鈴木 武玄「いけめん」



秋田市議会議長賞

秋田県立秋田南高等学校・中等部1年
塚田 悠生「戦闘態勢」

第48回 サマースクール(7月26日、28日)



キリンへのエサやり



ワークショップ

参加した小・中学生28名は、獣舎の清掃やエサやりなど、動物の飼育作業を体験し、体験後は「みんなの描く未来の動物園」をテーマにグループワークを行いました。どの班も子どもらしい発想で未来の動物園を描き、班ごとの発表を興味深そうに聞いていました。

夜の動物園(8月11日～16日 ※13日を除く)

今年も動物たちの体調を考慮して13日をお休みとし、5日間の夜の動物園を開催しました。3年ぶりに「まんまタイム」などの動物イベントを行い、期間を通して約10,000人が来園しました。



ユキヒョウのリヒト



カピバラのまんまタイム

フタコブラクダ寄贈セレモニー(9月4日)

穂積市長のほか、高木美保名誉園長も出席し、ラクダ展示場で寄贈セレモニーを開催しました。導入経緯の紹介や、愛称の発表なども行いました。



愛称発表



高木名誉園長によるラクダへのエサやり

今後の
イベント
(予定)

11月27日(日)「さよなら感謝祭」

2023年1月7日(土)～2月26日(日)の土日祝日「雪の動物園」

飼育日誌

1/1	ニホンイヌワシ	第1ペア、交尾時の鳴き声あり。巢材の搬入もあり。第2ペア2羽で巢の縁に止まっていることが多い。巢いじりもあり。
1/4	カナダヤマアラシ	2頭寄り添いながら採食あり。(搬入後初めて)
1/5	アフリカゾウ	伏臥に手こずる。採尿。
1/6	キリン	カンタ死亡後、リンリンとケイタ、過敏な状態となっている。
1/8	グリーンイグアナ	爪切り。
1/9	ワタボウシタマリン	麻酔下ギブス治療。
1/11	ミーアキャット	川原群、母親妊娠判定のレントゲン撮影。母親、妊娠確定。
1/13	アメリカビーバー	チャト♀、麻酔下で歯切り・陽と月の2頭にマイクロチップ挿入
1/15	アナグマ	いけだみ、冬ごもりのため、絶食。
	ユキヒョウ	通路下にて網越しで見合い。アサヒの攻撃性見られず。反応良好。
1/16	ユキヒョウ	アサヒ♀、発情兆候あり・鳴き。
1/18	ユキヒョウ	同居(2日目)。同居時の2頭の関係性が良化した。
1/21	ニホンコウノトリ	営業行動。
	ユキヒョウ	同居(5日目)。
1/22	キリン	ケイタ♂、パドックオープン時、興奮し暴走状態となる。(積雪影響)
1/23	ノゾロオマキザル	ナナエ♀、朝、動きが悪い。エアコン設定温度26℃→30℃にし保温球設置すると動き出る。
	ミーアキャット	母、出産に備え産箱へ移動。
1/24	アフリカタテガミヤマアラシ	交尾確認。
1/29	ニホンイヌワシ	第2ペア、不完全な交尾は数回確認。
2/2	アフリカゾウ	左耳採血可能か確認。採尿・採糞・採血。アンクレットにチェーン付ける練習開始。
2/4	ミーアキャット	死亡(出生正確数不明だが、死体は2匹確認)。
2/10	アフリカゾウ	ホルモン剤投与試験。
2/15	イヌワシ	たつ子♀、3卵目の抱卵確認(※確認日)。
2/18	ケヅメリクガメ	フミヤ♂、採食戻らないため、温浴再開。尿酸排泄確認。
2/20	ニホンイヌワシ	西目♀、2卵目の産卵(15:50:07)を確認。
2/22	モリアオガエル	♀、新たに泡巢の排泄あり。腹部の膨らみほとんどなし。
2/23	ユキヒョウ	アサヒ♀、発情兆候を確認する。
2/24	アフリカゾウ	ホルモン剤投与試験2回目。軟便、整腸剤投与1日目。
3/2	ニホンリス	♀の発情。①②、③④を同居。
3/5	ミニブタ	とん平♂、朝一大きめのてんかんあり。異常なてんかんの長さ。
	イワシャコ	新成♀、鳥インフルエンザ検査(陰性)、旋回行動あり、右眼瞼浮腫、角膜穿孔の可能性あり。
3/8	ツキノワグマ	冬ごもり管理終了(給餌開始)。
3/11	アナグマ	いけだみ、冬ごもりから起きる。
3/12	ニホンイヌワシ	西目♀、抱卵放棄、採卵する。第1ペアへ移卵、第1ペア卵採卵。
3/13	フンボルトペンギン	繁殖ペア(右紫♀×左青黄♀)のA卵を仮親(右青黄♀×左緑白♀)の巣に移動。
3/14	トナカイ	ルミ♀、右角落角。
3/17	チンパンジー	ボンタ、コタロウ、J太郎、地震の影響あり。ルイ♀皮膚治療薬内服。
3/22	ジャンボウサギ	新規個体3頭検査終了。ふれあいに移動。
	アフリカゾウ	体中のアカギレ、擦過傷が目立つ。整腸剤(ピオスリー300g/日投与)27日目。
3/24	ヒツジ	ルバ♀、起立不可のため吊り下げ式の担架を設置。

お客さまの声

4/6 動物園に行く、明日から仕事も学校も頑張れる。行けば行くほど元気をもらっています。子どもと喧嘩した後に動物の親子を見ると、「あー怒り過ぎたか」と反省しています。

4/9 天空の楽猿、何度入ってもいいですね。お気に入りのスポットです。前はよくおとなりさんとケンカしていたブラザグエノン、おとなりさんが変わって少し落ち着いたように思います。

4/23 いつも幸せな時間になります。家族にとって大切な場所です。ありがとうございます。

5/11 動物たちは、飼育員さんの愛をたっぷりもらって幸せですね。

6/4 説明がわかりやすいです。シンリンオオカミの説明は、オオカミを取り巻く現状が伝わりました。

6/12 いつ来てもキレイで頭が下がります。エントランスの花壇がとてもカラフルで、「動物園をまわるぞ!」と気合いが入ります。

3/30	ライオン	ロア♀、麻酔下にて四肢の爪切り実施。
4/1	レッサーパンダ	ケンシン♀、午前中頻繁に恋鳴き。ひなた♂、左耳耳介に傷あり、インジン球で消毒。
	コツメカワウソ	キトラ、たまごの♀2頭ダイエット開始。
4/3	カナダヤマアラシ	モズク♂、体重測定9.20kg
4/5	ライオン	マンゴー♀、展示場で嘔吐できず卒倒し一時呼吸停止、自力回復後急遽収容。
4/13	マーコール	ゆべし♀、腹部大きい。
4/17	カナダヤマアラシ	メーブル♀、発情か?
4/20	アメリカビーバー	性別チェック。チャルは♀と再確認。
4/23	アフリカゾウ	起立不能、治療。
4/27	ユキヒョウ	アサヒ♀、巣箱に入る頻度、時間増加。
4/28	シンリンオオカミ	シン♂、14時頃と16時半頃にてんかん発作の痙攣を起こす。抗てんかん薬内服投与実施。
5/1	アフリカゾウ	少々軟便になってきた。夜間泊まっていた観察は昨夜で終了。
	インコ舎	急な低温の影響と思われる個体の異常を確認したため、サッシ再設置。
5/3	ホンドキツネ	採食全くなし。水様便1カ所、血が混ざった粘液便と思われるもの1カ所あり。
5/4	レッサーパンダ	ユウタ♂、一時、下半身に力が入らず腰砕け状態になり歩行困難。
5/9	ニホンコウノトリ	卵を孵卵器に移動。検卵の結果3卵が有精、1卵が無精。
5/11	ユキヒョウ	子、10日22時頃に右目の開眼をモニターで確認。
5/15	キリン	ケイタ♂、ハズバンダリートレーニング本格開始。
5/16	フクロテナガザル	天、陰囊部に毛が生えてきていたことから、性別はオスと確定。
5/17	エミュー	隣県で高病原性鳥インフルエンザ発生したため、展示場ネット張り作業(飼育全体作業)。
5/19	ユキヒョウ	仔、体重測定・性別判定実施。メスと確定。
5/21	アフリカゾウ	夜間休息時間確認。
5/27	トナカイ	ルイ♂、起立困難。2度起立補助して起立させる。
5/29	ゼニタナゴ	FRP保全池、稚魚浮出。約120尾。
5/30	ニホンコウノトリ	擬卵撤去。
	アムールトラ	令♀、麻酔からの覚醒に時間が掛かり撤出延期。
6/2	アフリカゾウ	伏せできた。左前肢爪付け根から排膿。
6/4	アフリカゾウ	左前肢爪付け根レントゲン撮影。
	ユキヒョウ	仔♀、産箱の前室に移動するようになった。
6/5	ハリネズミ	病院からふれあい事務所に移動。
6/6	マーコール	ゆべし♀、乳房大きく見える。
6/12	マーコール	子授乳確認。
6/14	シンリンオオカミ	シン♂、病院(病室3)に移動。箱入れ、病院収容いずれもスムーズに完了。
6/15	ユキヒョウ	仔♀、アサヒ♀の持ってきたプロイラーに興味を示し、食べる動作を見せる。
6/16	アフリカゾウ	軽いアタック行動。
6/19	マーコール	仔、草採食している様子。
6/21	シンリンオオカミ	ジュディー♀、麻酔下病院移動する。
6/22	シュバシコウ	移動(越冬舎→旧シュバシコウ舎)。
	キョン	♀、同居訓練。
6/24	カナダヤマアラシ	メーブル♀、体重僅かに増。
6/30	ユキヒョウ	仔♀、ワクチン摂取・マイクロチップ埋込・性別判定他健康チェック。
7/5	ホッキョクオオカミ	ムーン♂、午後から展示場への展示訓練(初)。放飼・収容スムーズ。
7/7	カリフォルニアアシカ	9時頃、繁殖に伴う雌雄の変化を確認。監視下で同居から分離まで実施(交尾確認)。
7/10	マーコール	クルミ♀、同居。
7/12	シンリンオオカミ	シン♂、反応・動き、採食量低下。左肩と右腰部に褥瘡形成。
7/17	ニホンイヌワシ	信濃×たつ子、猛禽舎工事のため、イヌワシ保全棟へ移動・体重測定作業。
7/28	ホッキョクオオカミ	ニッキー妹・ルーシー姉、朝、2頭で外展示場に出す。

かたばた通信

来年の開園50周年を記念し、正面ゲートの前に記念モニュメントを設置します。「大森山アートプロジェクト」を共同で行う秋田公立美術大学生のほか、台湾・韓国の学生からもデザイン案を募り、選考で選ばれた作品を来年3月の開園セレモニーでお披露目をする予定です。果たしてどんな作品が出来上がるのか、どうぞお楽しみに!(金)

